

## 声の記憶を辿りながら



熊谷ユリヤ 著  
思潮社  
2010.6

ある朝、グランドハーブを調弦する私の耳元で、激しい音を立てて弦が切れた。その瞬間、長い間、書けずにいた日本語の詩が戻った。ハーブを効果音に弾き語りをするための詩「この惑星が熟して落ちて朽ち果てる前に」が出来上がったのは、詩集の表紙にある「ハーブと女」の銅版画を予備弦の箱に見つけたときだった。

日本語の詩集としては9年ぶりとなるこの詩集は、「持続可能な地球」「異文化体験と異次元体験」「地球に生まれ、生き、去っていくこと」の三つをテーマとし、それらを「記憶」というキーワードでつないでいる。

最初のテーマでは研究分野のフィールドワークとして行う会議同時通訳で扱う環境問題、人口問

題、絶滅種・危惧種などを、人間自身も絶滅危惧種であるという視点から扱う。

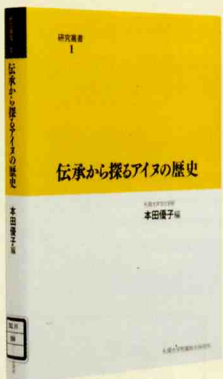
二つ目は、この国から旅立ち、二つの時間帯を生き、戻ってくること、英国での研究留学中に味わった日本人としての体験、詩人会議で訪れたモンゴル、中国のゴビ砂漠、イスラエルなどでの体験やイメージを扱う。

最後のテーマでは、日常的な題材から飛躍的な発想をすることで、生誕・喪失・追悼・死・再生などに思いを馳せ、生命への問いに震える声が、非日常の視点から、イブの記憶を通じて地球に雪のように降り注ぐ幻想を扱っている。

第2開架閲覧室 [911.56 || Ku33]

熊谷ユリヤ(経済学部教授)

## 伝承から探るアイヌの歴史



本田優子 編  
札幌大学附属総合研究所  
2010.3

札幌大学ペリフェリア・文化学研究所(2009年4月に札幌大学附属総合研究所に統合)では、2004年から2008年にかけて、【アイヌ文化研究の今】を統一テーマとするシンポジウム&公開講座を開催した。本書は、それらの講演および討論の中から、アイヌ口承文芸と歴史との関係性について語られた部分を抽出し、一冊にまとめたものである。

周知のように、前近代のアイヌの人びとは、自らの歴史を文字で書き残すということをしなかった。当事者による文献資料が無い中で、主体的な歴史というのはどのように構築しうるのだろうか。

手がかりの一つが物語にある。アイヌ社会に語り伝えられてきた口承文芸には、アイヌの人びとの歴

史意識が色濃く反映しており、歴史資料としての利用には多くの可能性が秘められている。しかし一方で落とし穴も多い。嚆矢となる問題提起、すなわち、英雄叙事詩成立の背景にはオホーツク人と擦文人の戦いがあるという説を知里真志保が提唱したのは1954年のことだった。そのちょうど半世紀後、気鋭の研究者たちが知里を批判的に検証しつつ議論を重ねることで、新たな視座が切り拓かれた。

本書により5年間の推移を今一度振り返り、到達した地平を確認していただければ幸いである。

第2開架閲覧室 [382.11 || D59]

本田優子(文化学部教授)